



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 相対的最小性と節構造

著者	伊藤 徳文
雑誌名	主流
号	53
ページ	121-136
発行年	1992-02-25
権利	同志社大学英文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015098">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015098</a>

# 相対的最小性と節構造

伊 藤 徳 文

## I

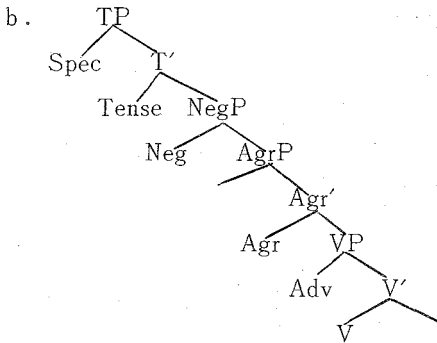
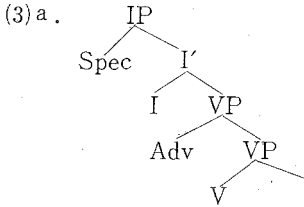
生成文法理論の歴史において、節構造をめぐる議論が現在に至るまで様々な形で行われてきたが、現在の構造表示の基礎となるのが Pollock<sup>1</sup>、及び Chomsky<sup>2</sup> において提示された構造表示である。二人が提示した理論は、動詞上昇と屈折要素（以下 Infl）下降をめぐるなされ、その結果、Infl をさらに時制（以下 Tense）と一致要素（以下 Agr）に下位分化できるものとしている。だが、Tense や Agr が節構造の中でどのような位置を占めているかについては、様々な仮説が提出されている。故に、本稿においては Agr を中心とした議論を分析し、その結果、定形節と不定詞節の構造的相違を明らかにするとともに、新たな節構造の提示を行いたい。

本稿では、まず、II 章において節構造に関する Pollock の先行研究を概観し、III 章では Iatridou<sup>3</sup> の分析に基づき Pollock の考えの欠点を指摘し、IV 章では否定要素（以下 Neg）を中心に、また、V 章では助動詞を中心に分析していき、新たな節構造を創生していきたい。

## II

Pollock は、Emonds<sup>4</sup> の分析に基づいて(1)と(2)のような英語と仏語の文を調べ、Infl の特質を明らかにし、Infl そのものを細分化していった。つまり、それ自身で最大投射を形成する Tense と Agr と Neg に Infl を分けている。

- (1) a. I often eat apples.  
 b. \*I eat often apples.
- (2) a. \*Je souvent mange des pommes.  
 I often eat apples.  
 b. Je mange souvent des pommes.



(1 a) と (2 b) の語順の違いは、(1 a) では Infl (この場合 Tense と Agr を含む) が副詞を後にして動詞の位置まで下降するに対し、(2 b) では動詞が副詞を越えて Infl の位置まで上昇するために生じるものと思われる。つまり、言語によって Infl が下降するのか、または、動詞が上昇するのかの違いがあることになる。(1 b) と (2 a) のような非文を説明するために Pollock と Chomsky は、Agr に関するパラミターを導入している。そのパラミターによると、英語の Agr は弱い要素であって動詞を引きつけることはできないが、仏語の Agr は強い要素であるから動詞を引きつける

ことができることになる。このパラミターの相違が (1 a) と (2 b) の英語と仏語の違いとして生起してくるのである。

また、弱い Agr への動詞上昇がおこったと仮定すると、動詞は Agr に対して主要部付加を行うため [Agr[V]] の構造が派生し、動詞は  $\theta$  役割を項に伝えられなくなり  $\theta$  基準によって非文と判断される。それに対して、Agr 下降の場合には [V[Agr]] の構造が派生し、 $\theta$  規準によって非文と判断されることはなくなる。ただ問題になるのは、移動した Agr の痕跡が m 統御<sup>5</sup> されず、先行詞統率<sup>6</sup> されなくなり、ECP<sup>7</sup> 違反がおこることにある。この問題を解決するために、Chomsky は、ECP は LF 表示に対する条件であるから、[V+Agr] という複合体が LF で再び Agr に上昇して ECP を満たすとしている。

以上のことから、仏語のように強い Agr を持つ言語においては動詞上昇がおこり、Agr に主要部付加し [Agr[V]] の構造が派生しても  $\theta$  役割付与が阻害されることはないと思われる。また、(2 a) から仏語においては動詞上昇は義務的であると思われるし、文法的な (2 b) の派生に関しても、英語の場合と同じように Agr 下降がおこり、ECP 違反を避けるために LF で Agr にもどるといふ派生を考えることもできるが、そのような英語に似た派生も Chomsky が考えるところの最小経済性の原理によって除外できる。この原理に従うなら、短い派生が長い派生よりも好ましいのであるから、Agr 下降が生じた時の 2 段階の派生よりも動詞上昇によって生じる 1 段階の派生がより適切なものとして選ばれることになる。

次に、Neg を含んだ文を調べてみると、(4)と(5)のような対比が見られる。

- (4) a. \*John likes not Bill.  
 b. \*John not likes Bill.  
 c. John does not like Bill.
- (5) a. Jean (n') aime pas Marie.

Jean not like Marie.

b. \*Jean ne pas aime Marie.

(4 a) では明らかに動詞上昇が起っているから非文と判断され、(4 b) が非文として排除されるのは LF で [V+Agr] が再び Agr に上昇することを Neg が阻害するからである。つまり、Neg が存在しているために ECP 違反が発生することになるのである。ECP 違反を避けるために Do 挿入がおこり (4 c) のような文法的文が派生する。(5 a) の派生では、動詞が Agr から Tense へと移動するのだが、LF において Agr に存在している痕跡が削除されるために ECP 違反がおこらないように思える。(5 b) は (2 a) が除外されるのと同じ理由で除外される。

助動詞は、(6)の文で示されているように副詞や Neg に先行する点では主要動詞とは異っている。

(6) a. John has completely lost his mind.

b. Books are often rewritten for children.

c. John has not lost his mind.

d. John is not working hard.

助動詞は動詞のように  $\theta$  役割を持っていないので Agr や Tense に移動しても  $\theta$  規準違反をおこすことはない。(6)の文からわかるように助動詞は Neg に先行して Agr から Tense へと移動している。また、(6 c) や (6 d) のように Neg を含んでいる文の場合にも (5 a) の派生と同じように Agr にある痕跡が LF で削除されていると思われる。

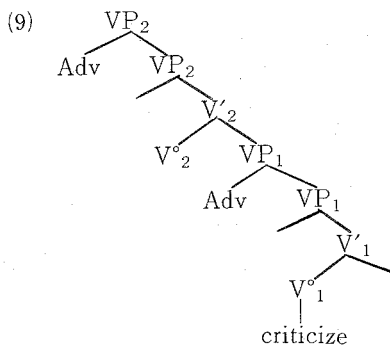
以上が Pollock が提出した分析であるが、次章においては Iatridou の分析に基づいて、Pollock の欠点を明らかにしていきたい。

III

Iatridou は, Agr の存在そのものについて分析を加えるために to 不定詞構文を中心に論を展開している.

- (7) a. John is believed to frequently have criticized Bill.
- b. John is believed to have frequently criticized Bill.
- (8) a. John is believed to frequently be criticizing Bill.
- b. John is believed to be frequently criticizing Bill.

Pollock の説明に従えば, (7 b) や (8 b) は (7 a) や (8 a) の助動詞が Agr に移動することで派生するのだが, Akmajian, Steele, and Wasow<sup>8</sup> では, have と be は独立した語彙項目であって, それ自身の最大投射を形成するものとされている. とするならば, (7)や(8)の構造表示は(9)のようになるであろう.



(9)の表示においては, 2つの動詞句がそれぞれ副詞を保持しており, それら2つの副詞の派生可能な位置を同時に語彙項目で埋めることは(10)や(11)に見られるように可能である.

- (10) a. John is believed to frequently be rudely criticizing Bill.  
 b. John is believed to rudely be frequently criticizing Bill.
- (11) a. John is believed to frequently have rudely criticized Bill.  
 b. John is believed to rudely have frequently criticized Bill.

以上から(7)や(8)の副詞の派生位置の違いによって助動詞が副詞を越えて移動しているとは言えないであろうし, Pollock に従えば(12)は(13)の助動詞が移動を起こして派生することになるが, 移動を起こしていない(13)が非文であることを考えると Pollock の考えは受け入れ難く思われる。

- (12) Mary is believed to be completely revising her dissertation.  
 (13)\* Mary is believed to completely be revising her dissertation.

次に構成素の点から Agr への移動を見てみることにする。Pollock によると不定詞節においては, 述語的連辞は任意的に Agr へ移動し, そこにとどまることができる。その結果, (15)は(14)における be が副詞を越えて Agr の位置へ移動することで派生すると言える。

- (14) I believe John to often be sarcastic.  
 (15) I believe John to be often sarcastic.

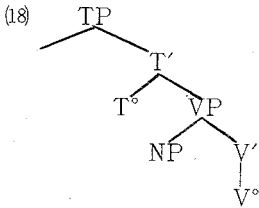
上記の分析の反例になると思われる例がいくつかある。たとえば, (16)においては副詞が小節の一部を占めており, 一つの構成素を成していることは, (17)の文が文法的であることから明らかである。

- (16) I consider John often sarcastic.  
 (17) Often sarcastic though John is, he is still very popular.

(16)と(17)において副詞が構成素の一部分を成していることを考えるならば, (15)

が(14)に動詞移動を適応した結果派生したものと考えられなくなるであろう。

以上、Iatridou の分析に基づき英語における Agr を分析してきたが、少くとも不定詞節に関しては Agr が存在していないように思える。だが、この結果を受けて Iatridou は、定形節における Agr の存在そのものも否定し、英語における節構造は(18)のようであるとしている。<sup>9</sup>



上に述べたように Iatridou の分析は不定詞節を、その対象としたものであり、Agr そのものが具体的な表示として存在しないのかどうか、特に定形節においてはどのようなのが疑問である。

#### IV

本章では III 章の分析を踏まえて英語における節構造での Neg を中心に見ていきたい。

まず、Pollock においては Neg は、Tense と Agr の間に存在しているとされているが、Neg をどのように表わすかについては言語間で違いが見られ、動詞の一部として表われる言語、助動詞として表われる言語、また、一種の副詞として表われる言語などがある。ここでは Ouhalla<sup>10</sup> に基づき Neg が複合動詞の構成素となっているトルコ語とベルベル語について分析してみる。

(19) a. John elmalar-i ser-me-di-o.

John apples-ACC like-NEG-past (TNS)-3,(AGR)



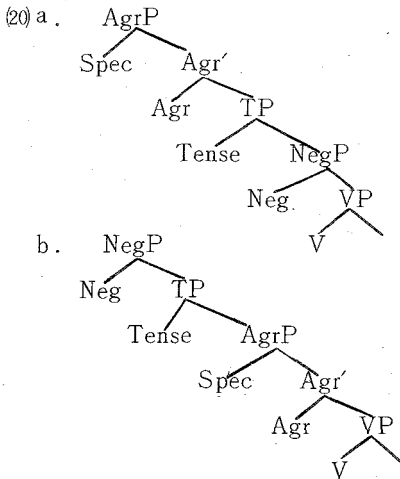
John did not like apples.

b. Ur-ad-y-xdel Mohand dudsha.

NEG-will(TNS)-3<sub>ms</sub>(AGR)-arrive Mohand tomorrow.

Mohand will not arrive tomorrow.

(19 a) のようにトルコ語では Neg は Tense/Agr の内部に存在するに対して, (19 b) のベルベル語ではそれらの外部に存在している. この Neg の生成位置の違いからトルコ語とベルベル語の節構造は以下のようにになっているものと推測される.



上記の構造を考えることでトルコ語では動詞が Agr に移動して複合動詞を作る段階で Neg が Tense/Agr の内部に派生すること, そして, ベルベル語では Neg がそれらの外部に派生することを説明できるし, また, トルコ語とベルベル語の Neg に関する考察から Ouhalla は Neg をめぐる(21)のパラメターを考えている.

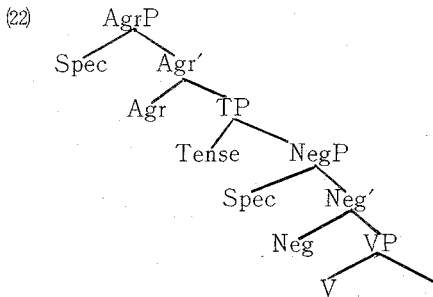
(21) The Neg parameter

a. Neg selects VP.

b. Neg selects TP.

つまり、Neg が VP を直接支配するのか TP を直接支配するのかについては言語間で相違が見られるということである。(20)からトルコ語は Neg が VP を直接支配するのに対して、ベルベル語では TP を直接支配することがわかる。

(21)のパラ미터に関して、英語は (21 a) の立場を、仏語は (21 b) の立場を取るものと思われる。また、Ⅲ章での議論より英語の不定詞節には Agr が存在しないように思えるが、その結論を定形節にもあてはめることには疑問が残るし、むしろ、定形節は Agr を含む節であって、不定詞節よりも大きな範疇と考えるのが妥当であるだろう。とするならば、英語の節構造の表示は(22)のようになる。



(22)においては、Agr が Tense よりも上位に位置し、Neg が VP を直接支配して、(21)のパラ미터に合致している。

ここで、(22)の節構造に従って(4)の文がいかに説明されるかを再分析してみる。

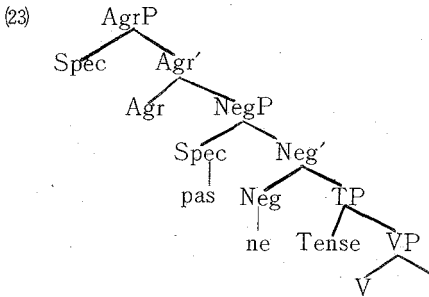
(4) a. \*John likes not Bill.

b. \*John not likes Bill.

## c. John does not like Bill.

(4 a) では動詞が Neg を越えて Tense, Agr へと移動していくが, 移動の途中には接辞ではない Neg が NegP の主要語として存在しているために, 動詞句内にある動詞の痕跡が先行詞統率されなくなり非文と判断される。つまり, Rizzi が提唱する Relativized Minimality によって Neg が, 痕跡に対する可能な統率子になってしまうからである。<sup>11</sup> (4 b) についても Agr や Tense が動詞の位置へ下降することで ECP 違反が発生するために非文と判断されることになる。

次に仏語の場合を見てみると, 仏語の Neg は ne と pas の二つの要素からなっており, ne は定形節においては複合動詞の一構成部分として生起するし, また, pas は副詞に似た特性を持つものとして生起する。故に, ne は NegP の主要部の位置を占めるのに対して, pas は指定部の位置を占めているように思われる。以上のことと Neg に関するパラミターを考え合わせるならば仏語の節構造は(23)のようになる。



(23)の構造によって(5)の派生がいかに説明できるかを見ていくことにする。

(5) a. Jean (n') aime pas Marie.

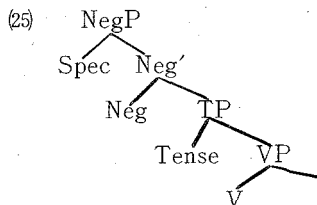
b. \*Jean ne pas aime Marie.

(5 a) においては、動詞は否定要素の一部 pas を NegP の Spec の位置に残し、Tense と Neg を通過して Agr へ移動する。ただ、ne は接辞であって Neg を通って行われる動詞移動を許可する点では英語の not とは異っている。(5 b) の派生においては、Agr と Tense の動詞への下降がおこるために ECP 違反が発生し、非文と判断される。

次に仏語の不定詞節についてみると、(24)のように ne と pas が隣接していて、しかも動詞を従えている。故に、(23)の構造を仏語が持っているとするならば、不定詞節においては動詞は Tense 以上へ移動をおこさないことになる。

- (24) a. Ne pas sembler heureux...  
not to look happy...
- b. Ne pas accepter la décision des juries...  
not to accept the decision of the jury...

上の事実より Ouhalla は仏語の不定詞節には AgrP が存在しないのではないかとしている。言いかえるなら、仏語では動詞を引きつける Agr が存在しないから動詞が Tense 以上へは移動しないと言える。とするならば、仏語の不定詞節は以下の構造をしていることになり、前章で考察した英語と同じように仏語の不定詞節にも Agr が存在しないと言える。



## V

前章では Neg をめぐる議論を見てきたが、本章では助動詞に関する分析を展開していきたい。

助動詞がいかなる範疇に属するかについては様々な考えがあるが、Akma-jian, Steele, and Wason においては、完了の have は  $V^3$  に属する指定部、進行の be は  $V^2$  に属する指定部であるとされている。その考えに基づくならば②6の文は②7の構造を持つことになる。

②6 John has been kissing Mary.

②7 John [ $v^3$  has [ $v^2$  been [ $v^1$  kissing Mary]]].

上の分析では、完了の have や進行の be などの助動詞は VP を補部に取り、動詞と考えられているが、この分析には反例がある。

まず第一に、②8に示されているように二次述語は VP の中に生起できる。

②8 Mary told John to eat the meal nude, and eat the meal nude John did.

しかし、②9の文が示すように二次述語は真の意味での VP の中にしか生起しない。

②9 a. They say John must have been eating the meal nude, and eating the meal nude John must have been.

b. ?? They say John must have been eating the meal, and eating the meal John must have been, nude.

c. ?? John must have been eating the meal nude, and Tom must have, too.

d. ?? John must have been eating the meal fully-dressed, and Tom

must have, nude.

(29)から二次述語は、本動詞によってライセンスされるのであって完了の have や進行の be などによってライセンスされることはないのは明らかである。故に、本動詞と助動詞が同じ範疇に属しているとは言えないであろう。

次に(30)のような付加疑問文を例に取ってみると、付加疑問文においては do は VP に取ってかわれる代動詞であることがわかる。

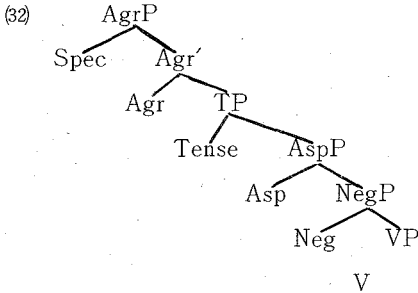
- (30) a. John likes Mary, doesn't he?  
 b. Mary does not like John, does she?

しかし、助動詞を含んだ文を付加疑問文にする場合には do は助動詞に取ってかわることはできない。

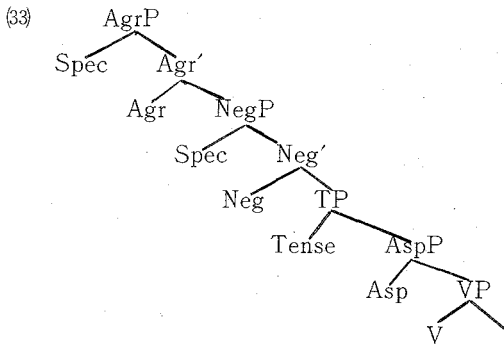
- (31) a. \*John has not lost his mind, does he?  
 b. \*The thief was not arrested, did he?

上の事実から助動詞は動詞句の構成素となることはできず、独自の最大投射を形成することがわかったが、問題になるのは、その生成位置である。

Pollock や Chomsky では助動詞は VP 内から Neg を越えて Agr や Tense へ移動するとしているが、Neg が存在しているために Relativized Minimality によって、そのような移動は不可能になる。また、Neg に関するパラメーターも考え合わせると、助動詞は基底ですでに Neg に先行しているものと思われる。すると英語の定形節の構造は次のようになる。



仏語の定形節に関しては、助動詞は Neg に先行する点では本動詞と本質的に同じ扱いができるであるだろうし、Neg のパラ미터の点から考えてみても(33)のような構造をしているとするのが妥当だろう。



本章では助動詞を中心に節構造を分析してきたが、英語と仏語における Neg の統語的特質のために助動詞の生起する位置が異っていることに注意したい。

## VI

本稿においては Pollock が提出した節構造を Iatridou に基づいて再考してきたが、その分析は英語の不定詞節を中心にしたものであった。その分析

によって Intradou は、節構造、つまり、不定詞節にも定形節にも Agr を明示する必要はないとしている。だが一方で、Ouhalla は、仏語の不定詞節には Agr が無いが、定形節には存在しているとしている。英語に関しても Ouhalla の仏語の分析を援用するならば、不定詞節には Agr があるが、定形節には無いと言えるであろうし、そのような分析のほうが妥当である。また、否定要素が他の主要部に対して持つ重要性を Relativized Minimality の点から明らかにするとともに、Ouhalla の提案した Neg パラミターを考えるならば、英語と仏語では、(32)と(33)のような節構造の違いが見られるし、また、不定詞節と定形節についてもそれぞれ違った構造を持つことは本稿で明らかにした通りである。今後は、副詞が果たす役割、あるいは、付加詞の取り出しに関する英語と仏語の違いを明らかにして研究を深めていかなければならない。

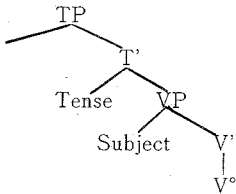
## 注

- 1 J. -Y. Pollock, "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry*, 20 (1989): 365-424.
- 2 N. Chomsky, "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," MS., MIT. (1988).
- 3 Sabine Iatridou, "About Agr(P)," *Linguistic Inquiry*, 21 (1990): 551-577.
- 4 J. Emonds, "The Verbal Complex V'-V in French," *Linguistic Inquiry*, 9 (1978): 151-175.
- 5 C 統御するとは、 $\alpha$  が  $\beta$  を支配せず、かつ、 $\alpha$  を支配する最初の  $\gamma$  が  $\beta$  を支配している時に  $\alpha$  は  $\beta$  を C 統御するという。  
また、上の定義において、 $\gamma$  が最大投射範疇の場合に  $\alpha$  は  $\beta$  を m 統御するという。
- 6  $\alpha$  が  $\beta$  を m 統御し、 $\beta$  を支配するすべての最大投射範疇が  $\alpha$  を支配している時に  $\alpha$  は  $\beta$  を統率すると言い、先行詞統率とは、 $\alpha$  が  $\beta$  を統率し、 $\beta$  と同一の指標を持つ先行詞となっている場合のことを言う。
- 7 ECP とは空範疇の中の痕跡に課せられる条件で、その内容は、痕跡は適正統率されなければならないというものである。



そして、 $\alpha$ が $\beta$ を統率し、 $\alpha$ が語彙範疇であるか、あるいは、 $\alpha$ が $\beta$ を統率し、 $\alpha$ が $\beta$ を束縛する先行詞である場合に、 $\alpha$ は $\beta$ を適正統率するという。

- 8 A. Akmajian, S. Steele, and T. Wasow, "The Category AUX in Universal Grammar," *Linguistic Inquiry*, 10 (1979): 1-64.
- 9 Iatridou は、Agr というのは構造的位置に対する表示ではなく、Spec-Head 関係をあらわすものではないかと提案している。そして、以下のような Agr の存在しない節構造を考え、動詞の一致要素の現われは、[+finite] Tense が VP を統率することによって生じてくる素性であるとしている。つまり、Agr は構造的なものではなく、素性を具現させる機能しか持たないものとしている。



- 10 J. Ouhalla, "Sentential Negation, Relativized Minimality and the Aspectual Status of Auxiliaries," *The Linguistic Review*, 7 (1990): 183-231.
- 11 L. Rizzi, *Relativized Minimality* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1990)において Rizzi は、以下の構造では、もし Z が X や Y と同種類のものであるならば X と Y を統語的に関係づけることができなくなるとしている。つまり、Z が Y にとって可能な統率率ならば X は Y を統率できなくなるということである。

[...X...Z...Y...]